

Where have all the soldiers gone?

—西南戦争従軍兵士・落合熊吉の足跡を追う—

鳥塚義和 (元公立高校教員)

はじめに

1971年、中学に入学し、初めて英語を学んだ。担当の若い女性教師が、ある日英文の歌詞を載せたプリントを配り、カセットテープで曲を流した。とても美しいメロディの曲で、心に沁みた。歌の題名は、Where have all the flowers gone? まだ、have gone という現在完了形は習っていないけど…と話しながら、歌詞を説明した。花を少女が摘む、彼氏のもとへ、若者は兵士になる、戦死して墓に入る、墓地には花が咲く。ぐるっと一回り。他の授業のことはすっかり忘れてしまっても、この場面だけはよく覚えている。

ずっと後になって、ベトナム戦争について学び調べる中で、この歌がどのようにして生まれ、なぜ世界各地の若者が歌ったのかを知った。あの時、あの教師は、どういう思いを込めて、中学1年生にこの歌を聞かせたのだろうか。授業とは不思議なもので、教師の知らないところで、教材が生徒の心に引っかかり、記憶に残る、こういうケースもあるのかなと思う。

兵士はどこへ行ったのか。定年で退職し、千葉県東葛飾北部地域をフィールドにして、あちこちの寺院の墓地や共同墓地を訪ね、戦没者の墓碑を調べている。近代でくりかえされた戦争。西南戦争に始まり日清、日露、第一次大戦、シベリア戦争、そして十五年戦争。調べ始めて分かったのは、何人が従軍し、何人が戦死したのか、こうした基本的なことが実ははっきりわかっていないということだった。せめて柏市の沼南地区という一地域に限っても、近代史において、何人の若者が兵士になり、どこへ行ったのか、はっきりさせたいと思い、墓地巡りを続けている。本稿では、手賀村（現柏市）から西南戦争に従軍した落合熊吉という一人の兵士の足跡を追った経緯を報告したい。

1. 落合熊吉を史料で探す

千葉県東葛飾地域の従軍者・戦没者について調べるときに、まず見るのが『東葛飾郡誌』である。1923年に東葛飾郡教育会が編集した書であり、西南戦争から日独戦争（第一次世界大戦）にいたるまでの戦没者リストを町村別に載せている。「戦役戦病死者」の「手賀村」の項目に、次の記載がある。

明治十年戦役 歩二 戦死 同十年四月廿八日 陸軍兵卒 落合熊吉

東京鎮台の歩兵第二連隊に所属していたことがわかる。「戦死」とあるので、『靖国神社忠魂史第一巻』（1935年）の索引で「落合熊吉」を探す。西南戦争の戦没者の場合、病死した兵卒は靖国神社には祭られていない。493 ページ、「第三旅」「東鎮歩二聯三大一中」「明一〇、四、二八」の項目に次の記載がある。

長崎陸病 兵卒 落合熊吉 千葉

第三旅団の歩兵第二聯隊第三大隊第一中隊に所属していたことがわかる。しかし、長崎陸

軍病院で死んだというのはどういうことだろう。前後の記述を見ると、官軍が隈府（現菊池市）をめざして攻撃をかけたときの戦死者が多数記載された後に、落合熊吉の名前がある。熊本県の隈府近くで負傷して長崎の病院まで運ばれたことは、別の資料で確認できた。

『沼南町史史料集 金石文 I』（1992年）には、泉の龍泉院に「一〇三五 落合熊吉墓塔」があることが記されている。戒名は「戦中浄仏清居士靈位」。

（右）明治十年三月九日□三旅□□□□入鹿兒島ニ夜行□□□□□□江出□同年四月廿八日□□南田島ニ於テ負傷之為」戦死ス

（左）（変体仮名の部分を現代仮名に直す）

国のため 名をかがやかさんと 思いしも 花にあらしの 身をぞかなしき
行年廿四才 落合熊吉

（裏）落合傳兵衛

「南田島」は、現在熊本県菊池市泗水町南田島であり、その戦いで負傷したことがわかる。この墓塔には剥落があるようで、□や□の個所が見られる。歌が刻まれているのは珍しい。「国のため」と従軍したが、「身をぞかなしき」と言うのは、戦死して尽せなかった悲しさよりも、命を散らした悲しさを歌っているのだろう。建設者の伝兵衛とはどんな人物なのだろうか。熊吉の身内なのか。龍泉院に行って、現物を見ることにした。

山門を入れてすぐ左側、日露戦争の戦没者の墓碑の隣に、熊吉の墓塔はあった。ところが、どう見ても墓石は新しく、100年以上も前のものとは思えない。剥落はなく、しかし、文字は途中空白になっている部分があり、『町史』に記載された文字列が並んでいる。住職に尋ねて疑問が解けた。墓塔の傷みが激しく、数年前に子孫の方が再建をしたという。市史編さんの際に文字を読みとった記録はあるが、元の墓塔の写真は残っていないという。剥落して読めなかったところには、どのような文が刻まれていたのだろうか。

2. 『至誠名鑑』

墓碑の銘文は、別の資料で確認することができた。1935年に非売品として限定出版された『至誠名鑑』という書物がある。これまで東葛地域の市史などで使われることはなかった。編者は、日露戦争で負傷し「廃兵」（傷痍軍人）となった川間村（現野田市）の秦野新兵衛である。520部だけ印刷し、役場、関係者に配ったものという。

秦野は、その巻頭言で「光輝アル名誉ヲ永ク子孫ニ遺シ社会ニ伝ヘ」るため、「徴兵ノ元祖タル西南役従軍者ハ全部、日清日露ノ両役其他各事変ニ参加シタル者ハ戦死病没者、廃兵、殊勲者ニ限り」574人の略歴戦歴を調査して名簿を編纂した、と述べている。丸1年かけて、東葛飾郡41ヶ町村の役場を訪ね、兵事係の協力を得て役場の資料を閲覧し、元兵士や遺族の家を一軒一軒訪ね歩き、聞きとり、墓碑や家に残る記録を書き写して集めている。敗戦とともに多くの兵事資料が処分されて失われたので、今となっては貴重な情報が満載されていることになる。

私は国会図書館でこの書を見つけ、その後古書店で購入した。私が持っている本には、「小金町役場」の朱印が押されている。手賀村の項に、次のように記載されている。

西南戦争従軍者 故染谷熊吉

明治十年三月九日第三旅団ニ編入鹿児島賊徒征討トシテ九州へ出張同年四月十日肥後
国南田島ニ於テ戦闘ノ際負傷シ入院加療遂ニ効ナク傷死ス（庭内ノ碑文ニ依ル）

建設者 染谷伝兵衛

名前が「落合」ではなく「染谷」となっているのはなぜか。秦野の勘違い、単純ミスなの
か、わからない。現在龍泉院にある墓塔は、秦野が訪ねた当時は「庭内」にあり、まだ剥落
などなかったのだから、全文を読み取ることができたのだろう。これによると、熊吉は4月10
日に南田島の戦いで負傷し、長崎の病院に運ばれて治療を受けたことがわかる。死亡したの
は、4月28日なのだろう。

『千葉県史通史編近現代1』によれば、千葉県は西南戦争終了後、県出身兵士の招魂祭を
行った。『千葉県史料近代編 明治初期六』（1968年）に、「明治11. 1. 31 西征従軍
戦死者ヲ祭ル挙行政」の記録がある。戦死者の名簿があり、戦死者だけでなく、病死者の名
前も載っている。落合熊吉については、次のように記されている。

同同泉村伝兵衛弟 元東京鎮兵卒 落合熊吉

「同同」は「下総国相馬郡」である。「伝兵衛弟」とあるので、墓塔の建設者は兄であるこ
とが判明した。当時、徴兵令の免役条項の中に、戸主と嗣子（長男）は免役との規定があっ
た。兄は徴兵された弟の死を悼み、墓塔を建てたものと思われる。千葉県の招魂祭の際に披
露された歌のひとつが次のものだ。兄が建てた墓標に刻まれた歌との違いをかみしめたい。

大君のためとて身をも命をも

捨し甲斐ある今日の御祭

中講義 増川頼風

龍泉寺の住職に教えてもらい、落合熊吉の子孫の家を
訪ねた。現在の当主から興味深い話を聞くことができた。
熊吉について、つぎのような言い伝えがあるという。落合
熊吉は、身体が大きい人だった。検査で神社の境内に張っ
た縄をくぐらされた時、他の人は首を縮める中、堂々と縄
にかかったので、村で最初の兵隊になった。

熊吉の墓塔がもともと家の庭内にあったものかはわか
らない。龍泉寺の墓塔が傷んでいたのだから、数年前住職と相
談して再建したという。また、軍からもらったものだという位
牌がある。「東京鎮台兵卒落合熊吉霊」と墨で書かれて
いる（写真右）。



3. 長崎に熊吉の墓碑を探す

西南戦争で戦死した政府軍兵士の墓碑は、戦場となった熊本をはじめ九州の各地にある。
東葛地域の出身者のものがどこにあるかネットで調べていて、「長崎微熱」というサイトに
行き当たった。長崎の佐古招魂社にある官軍兵士墓地の説明があり、「佐古招魂社祭祀者デ
ータベース」が公開されている。試みに「落合熊吉」で検索したところ、何と1191件のデ
ータの中からヒットした。墓番号がついている。さっそく管理人の平野恵子さんに連絡をと

った。データベースは、『招魂社沿革概要』をもとに、独力でデータを打ち込み、作成したという。大変な労力に頭が下がる。取材に同行していただけることになった。

2019年9月18日、佐古招魂社に案内してもらった。長崎市の中華街の南東にひろがる丘の上、仁田佐古小学校の隣に佐古招魂社がある。現在は地元の町内会が管理していて、カギを借りて中に入る。かなり草が生い茂っている(写真右)。年に一度の慰霊祭の前に、草取りなどが行われているという。



平野さんがだいたいこのあたりだという場所の草を刈りながら、墓碑の刻銘を調べていくと、ついに落合熊吉の墓碑を発見した(写真下)。墓碑の正面に「陸軍兵卒落合熊吉之墓」、裏面に「千葉縣第十四大区一小區泉村平民」、右側に「東京鎮臺歩兵第二聯隊第三大隊第一中隊」と刻まれている。左側には、負傷、死亡した日にちと経緯が次のように刻まれていた。



落合熊吉の墓碑 左から正面、左面、裏面

明治十年四月十日於熊本縣下

肥後國合志郡南田島負傷後同

月廿八日長崎縣肥前国長崎病院ニ於テ死

墓碑はいずれも長年風雨にさらされ、傷みが激しい。熊吉の墓碑にも補修の跡が見られる。右隣の墓碑は上部が崩れてしまっている。一つひとつの墓碑を見ていくと、埼玉県、広島県、石川県など全国各地から徴兵されてきたことがわかる。中には、「開拓使屯田兵」と刻まれた墓碑もある。なお、墓地は、第二次大戦後小学校の用地確保のためかなり縮小し、その時に墓碑も移動したり、取り払われたりしたのではないかとされている。かつては土葬だったので、人骨が多数出土したと地元の人が語っていた。

仁田佐古地区ふれあいセンターで、『招魂社沿革概要』などの資料をコピーさせてもらった。佐古招魂社の沿革は次の通りである。長崎港は、戊辰戦争以来、戦争時には兵站基地として使われてきた。特に1874年の台湾出兵では、将兵4500人が長崎港から出発した。台湾でマラリアなどに罹り、多数の病人が出ると、長崎の西洋医学校附属病院に収容して治療したが、病死者が相次いだ。陸軍は病院の近くに招魂場を設け、戦死者9名、送還輸送中の病死者55名、病死者317名を葬り祀った（病死者総計561名という記録もある）。

1877年、西南戦争が始まると、熊本県から船で長崎に負傷者が運ばれ、この病院や近くの寺院に設けられた臨時病院に収容された。死者が多く、招魂場が狭いので、現在地に移転をしたという。

佐古招魂社には、戊辰戦争、台湾出兵、西南戦争に関わる戦争記念碑が5つもある。私も今回初めて知ったのだが、台湾出兵について、こうした戦争碑があることはほとんど知られていない。平野久美子『マブイの行方ー牡丹社事件 日本と台湾それぞれの和解』（集広舎、2019年）の著者も、2016年秋にここを初めて訪れたという。

4. 戦場の村・南田島

西南戦争は士族の薩摩軍に対し、徴兵制の政府軍がその実力を試された戦いでもあった。政府が民衆の徴兵忌避に直面して、兵士の徴集に苦勞していたことは、1877年2月1日に右大臣岩倉具視が出した付達に読みとることができる。

第十七号 使府県 兵役ハ国大事人民必ラス服セサルヘカラサルノ義務ニ候処人民未タ全ク之ニ通曉セス徴募ノ際動モスレハ遽カニ他人ノ養子ト為リ又ハ廢家ノ苗跡ヲ冒シ甚シキハ自ラ其支体ヲ折傷スル等ヲ以テ規避スル者往々有之是レカタメ遂ニ定員ノ



長崎・佐古招魂社

落合熊吉の墓標は、右側の列にある。

不足ヲ生スルニ至リ不都合少ナカラス候条猶一層精密ニ注意シ管下人民ヘモ丁寧説諭シ勉メテ是等ノ規避ヲ防キ候様可致此旨相達候事（JACAR：Ref. C07040043100、「徴兵忌避の儀に付達」明治10年「太政官達 完」[防衛研究所]）

人民が徴兵制の趣旨を理解せず、兵隊養子になったり、身体を毀損したりして徴兵を忌避するものが多く、定員を確保できないので、忌避を防ぐよう府県に通達している。徴兵された後も、脱営、逃亡する兵士が後を絶たなかったことは陸軍裁判所の記録で確認できる。1876年12月、佐倉の歩兵第2連隊では、「外出先ヨリ脱走帰郷」などにより兵士が処罰された事例が4件あった（JACAR:Ref. C08010479600、「第十九号付録第二明治十一年十二月一三、一四、一六、一七、一九、二一、二三、二四日陸軍省日誌」[防衛研究所]）。

熊吉のいた歩兵第2連隊は、横浜港から船で出て、神戸を経て博多に上陸し、第三旅団に編入された。政府軍は山鹿を攻略した後、薩摩軍が陣取る隈府をめざして東へ向かった。三浦梧楼少将が率いる第三旅団に所属する将校の一人、亀岡泰辰は本営にいて戦闘の状況をよく知ることができる立場にいた。亀岡の記録した『第三旅団西南戦袍誌』（偕行社、1931年）によって、戦場の実相を探ってみよう。

3月18日、山県有朋参軍は次の告諭を出した。

凡戦闘線に列し或は応援隊に備はる兵卒にして戦に臨み引退き、又は頹れ立ち全軍の兵気を敗り軍機を誤らしむる者あらば将校は用捨なく之を打殺し、以て総崩の患を防ぐべく且哨兵守兵の職務を怠り或は事故に託し守地を逃亡する兵卒あらば直に之を捕縛し、裁判官に附斯し其罪を治め軍律に照して之を罰すべし（後略）

前線から逃亡する兵士がいたら、将校は用捨なくこれを打殺すよう命じている。20日には第三旅団長三浦梧楼が、銃器が破損しても戦場から離脱することを禁じた。逃亡する兵士がいたからこそ、こうした布告が出されたのだ。実際、軍団裁判所が千葉県に、逃亡した兵士3人を処罰したことを伝えた記録がある（JACAR:Ref. C09083420000、「逃亡の件」。C09083426200、「逃亡自首する件」。C09083303500、「降隊徒刑の件」[防衛研究所]）。いずれも「徒刑一年」の罰が科せられている。

こうした状況で戦死者が相次ぐ。4月4日、南田島への攻撃を開始した。5日戦死22、負傷88、9日戦死5、負傷34。10日戦闘参加者1047、戦死36、負傷80。熊吉は10日に南田島で負傷し、長崎陸軍病院に運ばれたが、28日に死亡した。

落合熊吉が負傷した南田島を訪ねた。菊池市の中心部（隈府）からタクシーに乗り、20分ほどで到着した。光徳寺という寺を訪ねた。過去帳に記録があるというので、見せてもらった。まず、薩摩軍が村に来て3月22日に陣地を構えたことが記されている。「當村上ヨリ東西ニ陣ス。村民為ニ離散ス」。村人は離散した。次に4月4日朝、政府軍が攻めてくる。「官兵来攻、古市宅ヲ始焼亡三十五戸」とあり、古市という人の家を始め35戸の家が焼けてしまい、戦場となった村は大きな被害を受けたことがわかる。『靖国神社忠魂史第一巻』には、4月5日のこととして、「官軍勢い乗じて潮の如く同村に侵入し、民家へ放火し」と記されている。過去帳には、「七日ヨリ移本陣于當地会計官ノ宿営トナル」とあり、光徳寺は宿営として使われたことがわかる。

光徳寺の天井には、撃ち込まれた砲弾によって大きな穴が開き、補修した跡が残っている（写真下左）。また、すぐ近くに第三旅団本営跡の標建てられている（右）。



おわりに

学び舎の教科書について、歴史学者の鹿野政直さんは、「歴史教科書についての通念を、大幅に破る」ものであったと述べ、「歴史教科書に載るほどのひとは“偉人”や“英雄”という通念を覆そうとした。有名と無名の序列を無化し、無名とはなにかを問い返し、だれもが固有名詞をもつ存在ではないか、という次元から、歴史における人間を考えようとした」と評価した。そして、「7歳のブリンコウと10歳のメアリから始まる産業革命、(略)23歳の森田忠信が体験した赤紙での召集などを盛り込んだ歴史教科書、人間の汗(学ぶ会の安井俊夫の言)や緊張や学習から出発するそれを、わたくしたちは手にすることができるようになったのである」と書いた(「人びと」から拓く歴史—学び舎発行の『ともに学ぶ人間の歴史』について—『歴史学研究』939号、2015年)。

無名ではない、固有名詞を持つ、一人ひとりの人間をとりあげるためには、私たちの地道な歴史の掘り起こし作業が必要である。特に地域史研究が重要である。西南戦争では、北海道を含む全国から農民が徴兵されて兵士として駆り出された。戦没地には官軍墓地、地域にも墓碑などが残っている。どこの地域でも、掘り起こしができるだろう。最近、出版された小田康徳編著『旧真田山陸軍墓地、墓標との対話』(阿吽社、2019年)には、そうした事例が多数紹介されている。